包谷力　記念SS

たったひとりのあなた

夜半過ぎまで、ネオンの灯りと英語の喧騒で満ちた街も、このバーの扉一枚閉じた瞬間、静寂の満ちた、落ち着きのある大人の空間に変わる。

この国で行う藤波理人のピアノコンサートツアー、最終日となる公演を、俺はスタッフとして見届けたばかりだ。もろもろの後始末を終えて、ついさっきまで喝采を浴びていた彼は、今、俺の隣で静かにグラスを傾けていた。

公演後に一杯、二人で一緒に交わすのが最近の習慣だ。いつもどおり、互いのグラスの端をかち、と触れ合わせてから、口を開く。

「それで、一足先に帰るんだって？」

「ああ、うん、そう。俺だけちょっと早めてもらったんだ。明日、朝一の便で帰るよ。早く帰って、びっくりさせたいんだ」

目の前の若手ピアニスト、藤波理人は、俺にそう返しながらも、遠い日本にいる彼女に向けて蕩けるような表情で笑った。

藤波理人は、器用な男である。

音楽家の世界は、常に競争と緊張の中にある。コンクールに出て、一定の評価を受けなければ、演奏を聞きに来る客は目に見えて減る。一度の演奏でも、名のある人間に酷評されれば、また客が減る。

客が減るということは、世間の興味が減るということだ。世間のニーズが減れば当然、仕事も減る。真に素晴らしい演奏をしていれば、誰かがどこかで認

めてくれるというものでもない。需要と供給、その関係性の中にちゃんと納まる在り方をしなければ、簡単に淘汰されてしまう。

藤波理人というピアニストの名前を知ったのは、数年前の事だった。

その頃の藤波はまだ、ピアニストとしてもまったく無名で、国内のコンクールで何度か小さな賞を取っていただけの、よくある新人の一人だった。

その日、クラッシック系のコンサートスタッフとして、キャリアを重ねていた俺は、ちょうど業界大物のソロコンサートについて回っていて、地方の会場を下見に行っていたところだった。

たまたまその日会場で行われていた、小さな楽団の演奏を聴いて、たまたまゲストで出ていた藤波理人を見ることになった。

見た目は、やたらと顔が綺麗な若い男。演奏は、技術は途上ながらも、独特の世界観が作られた美しいものだった。舞台を降りた藤波理人にも会うことができたが、どこかふわふわした印象の、浮世離れした男、という印象だった。

この世界にいるのに必要なものは、技術でも才能でもない、強かさだ。ピアノは一流、だがあの様子ではきっとこの世界で勝ち上がって、生き残ることは出来ないだろう。いいところまでいっても、おそらくこの世界の汚さに本人が嫌になって、離れてしまうに違いない。ピアノさえ弾ければいい、という人間は生き残れないのだ。恐らくもう見ることもない、そう思ってその時、名前を覚えることすらしなかった。

だが数年後、若手のピアニストが海外で賞を取り、ソロコンサートも行うという話を聞いた。名前を聞くと、それがあのすぐに消えてしまうだろうと思っていた藤波理人だったことに、ひどく驚いた。

事務所からの依頼でスタッフについた俺は、興味津々だった。あのふわふわした男が、どうして生き残れたのか。誰か強力な後援者でもついたのか、そんな邪推をしながら顔合わせにいくと、そこにいたのは以前と同じようで、明らかに何かが決定的に変わった藤波理人だった。

若さの変わらない外見、ふわふわした表情は以前と全く変わらない。それでも、こいつ、変わった、と一目でわかったのは、纏う空気が違ったから、というか。

この男はいい。長年、沢山の音楽家に触れ合った勘がそう思わせた。気づけば頼み込んで専属スタッフにしてもらい、そこから何年か経った今は、藤波のプライベートも知る気の置けない仲になった。

ふわふわしていた男が、初めて見かけたあの頃と大きく変わったのは、そのふわふわした己の性質を上手く活用できるようになったことだ。敵を作らない。味方を安易に量産しない。だが空気になる以上の存在感を見せつける。そういう強かな器用さを身に着けていた。

どうしてそんなことが出来るようになったのか。その理由を俺は、教えてもらえる仲にある。

「いっそ、こういう遠征の時は連れてきたらいいんじゃねえのか？」

「駄目だよ、彼女、仕事あるからね」

「別に働かなくてもいいだろ、お前、一生食わせていけるじゃねえか」

「駄目。彼女が、自分で辞めるって決めるまでは、俺は応援するの」

そういうもんか。小さく笑ってグラスを口に運びながら、首を傾ける藤波は、

それだけで絵になる外見をしている。最近はメディア露出も多い

から、キャーキャー言う女子はたくさんいるだろう。
でも、藤波があの笑みを直接向けるのはただ一人だ。どんな色気や財力を見せつけられても、器用に避けて、ただ一人のところに帰る。藤波のすべてを変えた、彼女の元に帰る。
「本当は、俺の演奏が聴きたいから、コンサートは行きたいって言ってくれてはいるんだけど」
「じゃあやっぱり、連れてくれば」
「そうなると、一人で来させるわけにいかないから迎えに行きたいし、一人で帰らせたくないから一緒に日本に帰ることになるし、必然的に三日もいないことになるんだけど」
「リハもできねえじゃねえかそれじゃ」
「そう、だから駄目って結論なんだよね」
彼女との出会いは、公演後のバーだったらしい。俺が最初に藤波を見た少し後位の話だと聞く。
都内の公演で、よく客席に目にする客で自分の演奏を聞きに来てくれている、と意識をしていた相手が、その日は地方の公演にも来てくれていたことに気づき、観客の表情に殆ど目を配らない藤波も、少し浮かれていたんだそうだ。
それで、公演後にたまたま入ったバーで彼女に会い、声をかけた、というのが出会いだと聞く。
「あの子ね、最初に話した時に言ってくれたんだ。『藤波さんの演奏は、心が蕩ける』って。何だか口説き文句みたいで、なんだか少しがっかりしたなあ。だから、激しい曲や暗い曲でも?って意地悪で聞いたら、そうだって自信満々

に頷くから、笑っちゃったよ」

ピアニストとしてはまだ無名だったからこそ、外見を餌に近づく女子に、その頃の藤波は敏感だったようだ。

それで、折角声をかけた彼女にそんなことを言われて、がっかりしたのだという。だが、藤波の心をとらえた女子が、そんな相手なわけがなかった。

「心が蕩けて、自分の回りの空気とか世界とかそういうものと一緒になって、曲の世界に広がることが出来るんだって。不思議だよね、曲の中の登場人物になるんじゃない、空気になれるって喜んでるんだよ。ああ、この子、素敵だなあって思って、もっと話が聞きたくなって、気づいたら彼女の世界の空気に俺がなりたくなってた」

「それで、口説こうとして断られたんだっけか？」

「そうそう、藤波さんの演奏が好きなのであって藤波さんの事は何も知りませんからって、逃げられちゃって。俺の世界は演奏だけだったから、そこで初めて、俺自身が演奏なんじゃなく、俺という人間が奏でるものなんだって認識できたんだよ。……すごいよね、すごいんだ、彼女」

これが藤波理人が器用な人間、に、というか「人間」に進化できた真実のすべてだ。そりゃあそれまで、ただの音の塊だったんじゃ、ふわふわしててもしようがない。

目をキラキラさせながら彼女の事を語る藤波に、喉で笑いながらグラスを口に運ぶ。このくだりはもう、この男と呑むようになってから何百回と聞いている。だからこの後に続く〆の言葉も勿論知っている。

「だから、彼女は」

「運命のひと、なんだろ？」

「そう、夏川さんよくわかってるなあ。……毎日思うんだ、俺、ただ一人の運命のひとと、一緒にいられるんだって。こんな、何億もひとがいる中で、俺の傍には運命がある。それだけがすべてなんだって」

蕩ける笑みを浮かべた男は、指先でカウンターテーブルを軽く叩いている。きっと、頭の中に何かの曲が流れているんだろう。それを眺めながら、琥珀色のグラスの中身を傾ける。

自分の生きてきた世界をひっくり返すほどの運命の相手、まるで少女小説のような物語が、この目の前の男を、ここまで育て上げた。そんな相手に出会うのは、どういう気持ちなんだろうか。どういう世界が見えるのだろうか。耳タコになるぐらい話を聞いて、三十を超えたい歳をして俺はいつも羨ましくなる。

「……もう、とっとと結婚しちまえ」

「まだ。……あの子が俺を、もっともっと離せなくなってから」

目を細めて柔く、甘く、そして少し悪く笑うのを見て、ああ、と思う。

運命は、きっと出会うものじゃなく、落ちるものでもなく。見つけて、掴まえるものなんだ、と。

終